老朽原発うごかすな！ニュース

第１０５号
発行・老朽原発うごかすな！実行委員会

［連絡先］
090-1965-7102

7・23高浜原発1号うごかすな！緊急集会でお伝えしたこと

繁華街を長蛇のデモが行く

福井県で繰り広げられている、使用済燃料についての関西電力と福井県知事との約束問題について、二つの観点で考えてみました。一つは、「約束と信頼（信用）」というキーワードで述べてみます。

大阪は、あきんど（商人）の町と言われています。「あきんど」は信用を一番大切にするものと思います。信用とは、「約束を守ること、嘘をつかないこと」です。

関西電力は、関電が福井県の原発で産み出した「使用済燃料を保管する中間貯蔵施設を県外で確定する」という福井県知事との約束を何度も破り、挙句の果てに詭弁を弄してごまかそうとしています。関電のこのような姿勢は、「あきんど」の風上にも置けない、「あきんど」の面汚しだと思います。

関電幹部の金品受領、カルテル、新電力会社の情報の盗み見、など社会的信用を損なうことを幾度となく起こしていることと今回の約束破りは繋がっています。心底反省し、面汚しの返上に努力すべきです。

もう一つは、「使用済燃料の問題は、地域間と世代間の公平性と公正性」にあるという観点から述べます。

歴代の福井県知事が中間貯蔵施設の県外立地を求めたのは、「原発の運転は認めたが、使用済燃料の保管まで認めたわけではない」との思いからです。原発で作られた電気はみんなで使うのだから、一部地域に原発の運転や、使用済燃料、これから放射性廃棄物を負担させてはいけないという、地域間の公平性、公正性を問うているものです。

更に放射性廃棄物は、未来の人たちに負担を負わせることになり、世代間の公平性、公正性も問われます。

この現実を考えた上で、私たちが今なすべきことは、「もうこれ以上の放射性廃棄物を増やさないこと」です。そのためには原発の運転を止めるべきです。

関西電力は、「あきんど」としての信用信頼を回復するためにも、今動いている原発を止め、これから稼働させようとしている老朽原発の高浜1・2号機の再稼働を中止すべきです。（残念ながら7月28日、高浜1号機は再稼働されました）

（福井県若狭町住民　石地　優）

7・23最古の老朽原発うごかすな！緊急集会に参加して

うだるような暑さの中で緊急の呼びかけにも関わらず３８０人もの人が結集して集会が行われることに、関西の運動の粘り強い力を感じました。しかもよくある動員で集まった義務的な集会ではなく、熱気と怒りに溢れるものでした。

関西各地からのアピールはそれぞれの現場で可能な行動が行われていることが伝わってきました。また、高浜や美浜の現地で暮らしながら反対運動を行うことは大変なことだ

関電本店に向けシュプレヒコール

と思いますが、それでも信念を貫かれていることには電力消費地に住むものとしては大きな勇気をもらうことができました。「原発には地域間にも世代間にも公平も公正もない」という言葉に大きく同意しました。

福島原発事故から12年以上が過ぎても、確かな事故の原因究明すらできない。原子力緊急事態宣言はいまだに解除できない。廃炉の目処も立っていない。そんな中でなぜこうも無責任に政府や電力資本は原発依存を続けられるのか！私には全く理解ができません。電力会社は「原発事故で直接死んだ人はいない」とうそぶきますが、原発事故がなければ亡くならずに済んだ人たちがいます。そして甲状腺がんによって未来の夢を奪われた子ども達がいます。こういった人たちに電力資本や政府はどのような償いをするのか。被害や痛みは民衆がすべて被り、事故の責任のある東電や他の電力会社、原発メーカー、株主、政府は何の被害も受けていない！事故の賠償はすべて税金や電気料金で行われる。自分たちの起こした惨事の責任を何一つ取ろうとせずに、また再び同じ過ちを犯そうとしています。

伊方原発は1号機が造られた時の基準地震動は200ガルです。その後3号機が造られる時には473ガルになり、570ガル、650ガルと、想定外の地震が起きるたびに基準地震動が上がっていきました。答えが先にあって、それに合わせて計算式を作っていくという出鱈目が行われています。これは伊方に限ったことではないでしょう。デマとイカサマの原発は今すぐ葬り去りましょう！

（伊方から原発をなくす会　名出真一）

破綻した岸田内閣の暴走を地域住民と運動の合流ではね返そう

23日、猛烈な暑さの中、関電本店前に近畿各府県から380人が集まり「最古の高浜1号うごかすな」と訴えた。参加者の多くが高齢とみられるが、みんな元気だ。主催は、2020年9月に発足した「老朽原発うごかすな！実行委員会」。大阪での行動の他、美浜や高浜での現地行動、200㎞を超えるリレーデモなど、その学生運動のような戦闘性には頭が下がる。集会に参加し、この会の粘り強く機敏な行動が、老朽問題でも汚染水の海洋投棄の問題でも、政権側に言い訳をさせる所まで追い込んでいると感じた。集会の準備・進行を見ていると、80歳を迎える木原壯林さん、事務局の女性などがこの運動を支えていると実感した。近畿だけでなく、名古屋の訴訟団の北村弁護士が自身の思いと「この闘いを次代に引き継ぐ大切さ」を力説した。同じ訴訟団の女性が「原発の老朽化はこのように」という新刊20冊をバッグに入れて販売を呼びかけていた。

ただ、完全にモラルを失った電力業界と、事態を理解せず平然と住民の命を切り捨てる岸田内閣は、破綻が見えても暴走する。だから、政治の壁が厚く見える。この壁を打ち破る力は、地域住民と運動の合流にしかない。残念だが、その観点での運動が前進しているとは言えない。この実行委員会の責任とは言えないが、各地域の運動に、2つのことを提起する。1つは、「安定ヨウ素剤の学校配備」を近畿と日本全国で提起し実施すること。これには、真面目な保守層を含めほとんどの議員が賛同する。そして、その根底には「原発は怖い。子どもの命は守る」という、反原発の大合流がある。もう1つは、「311甲状せんがん裁判支援」にとりくむこと。これも、フクシマで放射能被害を受けた青年7人の現状と思いを知れば、殆どの人が合流できる課題である。不一致点を強調してバラバラになることは権力の望むところである。一致点を見つけて住民が合流する。これは可能である。これが岸田GX＝原発推進を止める道である。

（彦根・愛知・犬上　原発のない社会をつくる会　事務局長　杉原秀典）

猛暑の関電本店前に380人